

〈共同討議 I / 「カテゴリーの超越論的演繹（第二版）」を読み直す〉

## 純粹悟性概念の超越論的演繹という問題

現代哲学からカントへ

近堂 秀

はじめに

本稿の目的は、現代の哲学思想に対する問題として、イマヌエル・カントが『純粹理性批判』超越論的分析論の「純粹悟性概念の演繹について (Von der Deduktion der reinen Verstandesbegriffe)」で展開する議論を読み直すべき意義を明らかにすることである。カントが「演繹 (Deduktion)」として展開する議論は、「われわれはまだ、哲学のテキストをどのように解釈すべきかを知らない」<sup>1</sup>というディーター・ヘンリッヒの言葉が依然として説得的に思われるほど、21世紀に入ってから膨大な研究が積み重ねられている<sup>2</sup>。近年の研究動向では、カントの哲学思想の発展史研究が一定の成果を収めているなか<sup>3</sup>、『純粹理性批判』の現代的解釈が超越論的論証をめぐる分析哲学との論争から現代の知覚の哲学へと射程を広げつつある<sup>4</sup>。そこで本稿では、筆者は、カントの哲学思想における証明方法としての演繹の独自性を指摘し、純粹悟性概念の形而上学的

カントの著作からの引用や参照箇所については、慣例に従って『純粹理性批判』は第一版をA、第二版をBとして頁数を記し、他の著作はすべてアカデミー版の巻数と頁数を記した。

- 1 D. Henrich, *Identität und Objektivität. Eine Untersuchung über Kants transzendente Deduktion*, Heidelberg 1976, S. 9.
- 2 Cf. G. Motta, D. Schulting, and U. Thiel (ed.), *Kant's Transcendental Deduction and the Theory of Apperception. New Interpretations*, Berlin/Boston: Walter de Gruyter, 2022.
- 3 Vgl. W. Carl, *Der schweigende Kant. Die Entwürfe zu einer Deduktion der Kategorien vor 1781*, Göttingen 1989; H. F. Klemme, *Kants Philosophie des Subjekts: Systematische und entwicklungsgeschichtliche Untersuchungen zum Verhältnis von Selbstbewußtsein und Selbsterkenntnis (Kant-Forschungen; Bd. 7)*, Hamburg: Meiner, 1996; F. Wunderlich, *Kant und die Bewußtseinstheorien des 18. Jahrhunderts*, Berlin/New York: Walter de Gruyter, 2005.
- 4 Cf. J. McDowell, *Mind and World. With a New Introduction*, Harvard University Press, 1996; J. McDowell, *Having the World in View. Essays on Kant, Hegel, and Sellars*, Harvard University Press, 2009; R. Hanna, Kantian non-conceptualism, in: *Philosophical Studies*, 137(1), 2008, pp. 41-64; R. Hanna, Beyond the Myth of the Myth: A Kantian Theory of Non-Conceptual Content, in: *International Journal of Philosophical Studies*, 19(3), 2011, pp. 323-398; R. Hanna, Kant's Non-Conceptualism, Rogue Objects, and The Gap in the B Deduction, in: *International Journal of Philosophical Studies*, 19(3), 2011, pp. 399-415; L. Allais, Kant, Non-Conceptual Content and the Representation of Space, in: *Journal of the History of Philosophy*, 47(3), 2009, pp. 383-413; C. McLearn, The Kantian (Non)-Conceptualism Debate, in: *Philosophy Compass*, 9(11), 2014, pp. 769-790; D. Schulting, Probleme des 'kantianischen' Nonkonzeptualismus im Hinblick auf die B-Deduktion, in: *Kant-Studien*, 106(4), 2015, S. 561-580.

演繹と超越論的演繹の内容に即して『純粋理性批判』の現代的解釈を検討する。

## 1 哲学の証明方法としての演繹

カントが演繹と呼ぶ哲学の証明方法は、どのような証明方法か。筆者はまず、カントの哲学思想における証明方法としての演繹の独自性を指摘する。

例えば『カントの超越論的演繹——三批判書とオプス・ポストウムム』<sup>5</sup>ではヘンリッヒとポール・ガイヤー、ジョン・ロールズとヘンリー・E・アリソン、スチュアート・ハンブシャーとロルフ・ペーター・ホルストマン、ブルクハルト・トゥシュリングとエッカート・フェルスターがそれぞれ検討しているように、カントの哲学体系全体を証明方法として支えるのが演繹である。カントは、『純粋理性批判』では空間概念と時間概念の「究明(Erörterung, *expositio*)」とともに純粋悟性概念と純粋理性概念の演繹を試み、さらに『人倫の形而上学の基礎づけ』と『実践理性批判』、『判断力批判』、『オプス・ポストウムム』などでも決定的な箇所でも証明方法として演繹を用いる(Vgl. IV, 453–455, V, 42–50, V, 289–290)。『純粋理性批判』でのカント自身による説明に即して言えば、演繹は権限もしくは権利要求に関する合法性の証明であり(Vgl. A84ff./B116ff.)、カテゴリーと理念についてアприオリな根源を示す形而上学的演繹とアприオリな認識の可能性を明らかにする超越論的演繹とに分かれる(Vgl. B159)。他方、究明は何らかの概念に属する徴表の判明な呈示であり(Vgl. A727/B755)、空間と時間についてアприオリな根源を示す形而上学的究明とアприオリな認識の可能性を明らかにする超越論的究明とに分かれるが(Vgl. B38, B40)、カントはこれを演繹とも言い換える(Vgl. A87f./B119f.)。

ヘンリッヒによれば<sup>6</sup>、14世紀終わり頃に生まれ、18世紀初め頃に「演繹文書(Deduktions-schrift)」として知られるようになった係争中の権利要求を正当化する出版物があり、演繹文書のスタイルが『純粋理性批判』の構成に影響を与えている。『純粋理性批判』では、対象についてのアприオリな認識を所有しているとする理性の要求への懐疑論者の挑戦に対して、理性の要求を正当化するのが超越論的分析論であり、正当化しえない場合にも使用が続けられるように裁定を下すのが超越論的弁証論である。特にカテゴリーとカテゴリー使用の根源への懐疑に対して、その特徴に訴えて権利を正当化するのが純粋悟性概念の超越論的演繹であり、演繹の前段階には認識能力に対する「反省(Überlegen, *reflexio*)」が含まれる。要するにカントは、『純粋理性批判』の超越論的感性論と超越論的分析論、超越論的弁証論では、究明ないしは演繹という法手続きに従って、空間と時間が純粋直観としてアприオリに与えられていること、量・質・関係・様相のカテゴリーが純粋悟性概念として、魂・世界・神の理念が純粋理性概念としてそれぞれ「総合的(synthetisch)」および「体系的(systematisch)」な「統一(Einheit)」のもとでアприオリに与えられていることを示し、感性と悟性という認識能力の協働としてアприオリな総合的認識が可能で

5 E. Förster (ed.), *Kant's Transcendental Deductions. The Three 'Critiques' and the 'Opus postumum'*, Stanford University Press, 1989.

6 D. Henrich, Kant's Notion of a Deduction and Methodological Background of the First Critique, in: *Kant's Transcendental Deductions*, pp. 29–46. (「超越論的演繹とは何か——方法論的背景からのアプローチ」湯浅正彦訳、『現代思想 臨時増刊号』第22巻第4号、1994年、84–100頁)

あることを明らかにするのである<sup>7</sup>。

このように演繹は、カントがみずからの思想を明らかにする決定的な箇所、権利要求のために法手続きとして用いる証明方法である。カントが『純粹理性批判』第二版での純粹悟性概念の超越論的演繹の書き換えを経て批判哲学の体系を完成させるなか、『実践理性批判』や『判断力批判』などでも用いる証明方法として、演繹がカントの哲学体系全体を支えるのは衆目の一致するところであろう。例えばヘンリッヒが独自の哲学思想を展開するにあたり、主語－述語形式の文の使用と自己意識の可能性との基礎的な連関に訴えるカントの議論を援用してユルゲン・ハーバーマスと論争になったように<sup>8</sup>、演繹が現代の哲学思想に対してカントの哲学思想の独自性を示しうることも改めて想起されたい。加えてリュディガー・ブプナーがルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン、W・v・O・クワイン、ピーター・F・ストローソンの議論に重ね合わせて超越論的論証としてカントの議論を解釈したさい<sup>9</sup>、演繹の独自性を法手続きの採用に見いだしていること<sup>10</sup>を指摘しておこう<sup>11</sup>。

## 2 演繹の現代的解釈の問題

では、純粹悟性概念の演繹は、『純粹理性批判』の現代的解釈では何が問題となるか。続いて筆者は、純粹悟性概念の形而上学的演繹と超越論的演繹の内容に即して現代的解釈を検討する。

- 
- 7 法手続きに注目した法廷モデルによる解釈については、次の文献を参照。石川文康『カント 第三の思考——法廷モデルと無限判断』、名古屋大学出版会、1996年、182-219頁。
  - 8 D. Henrich, *Fluchtlinien. Philosophische Essays*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1982, S. 134-151. (『現代哲学の遠近法——思考の消尽線を求めて』藤澤賢一郎訳、岩波書店、1987年、176-200頁) ; J. Habermas, *Nachmetaphysisches Denken. Philosophische Aufsätze*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1988, S. 18-34, S. 267-279. (『ポスト形而上学の思想』藤澤賢一郎・忽那敬三訳、未来社、1990年、19-40頁、330-345頁)
  - 9 ブプナーに先行する解釈として、超越論的心理学の「想像上の主題」を素通りしたうえで、純粹悟性概念の超越論的演繹から超越論的論証を再構成するストローソンの解釈、カテゴリー図式の唯一性を明らかにするような超越論的演繹を不可能とするステファン・ケルナーの解釈がある。Cf. R. Bubner, Kant, Transcendental Arguments and the Problem of Deduction, in: *The Review of Metaphysics* 28, 1975, pp. 453-467. (『カント・超越論的論証・演繹の問題』富田恭彦／望月俊孝訳、竹市明弘編『超越論哲学と分析哲学——ドイツ哲学と英米哲学の対決と対話』、産業図書、1992年、3-21頁) ; P. F. Strawson, *The Bounds of Sense, An Essay on Kant's Critique of Pure Reason*, London 1966. (『意味の限界——『純粹理性批判』論考』熊谷直男、鈴木恒夫、横田栄一訳、勁草書房、1987年) ; S. Körner, The Impossibility of Transcendental Deduction, in: L. W. Beck (ed.), *Kant Studies Today*, Open Court/La Salle, Illinois, 1969.
  - 10 R. Bubner, Selbstbezüglichkeit als Struktur transzendentaler Argumente, in: Hrsg. von W. Kuhlmann und D. Böhler, *Kommunikation und Reflexion, Zur Diskussion der Transzendentalpragmatik, Antworten auf Karl-Otto Apel*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1984, S. 304-332. (『超越論的論証の構造としての自己関係性』大橋容一郎訳、『超越論哲学と分析哲学』、83-108頁)
  - 11 超越論的論証をめぐる論争については、次の拙論を参照。「超越論的論証と現代の超越論哲学」、法政大学言語・文化センター編『言語と文化』第18号、2021年、127-148頁。

## 2-1 純粋悟性概念の形而上学的演繹と超越論的演繹

『純粋理性批判』における純粋悟性概念の形而上学的演繹は、判断表を示す議論と各カテゴリーを導出する議論からなる。カントはまず、判断一般のすべての内容を捨象し、そのなかの単なる悟性形式のみに注目することで、判断における思考の「機能(Funktion)」ないしは悟性の論理的機能の表として判断表を示す(Vgl. A67ff./B92ff.)。続いてカントは、アプリアリに客観と関係する純粋悟性概念として各カテゴリーを判断表から導出する(Vgl. A76ff./B102ff.)。カントは、各カテゴリーを導出する根拠について、次のように考える(Vgl. A79/B104f.)。一つの判断の内の様々な表象に統一を与えるのと同じ機能が一つの直観の内の様々な表象の単なる「総合(Synthesis)」にも統一を与えるが、この機能が純粋悟性概念である。同一の悟性が概念の内で分析的統一を介して判断の論理形式をもたらす「働き(Handlung)」を通じて、直観一般における多様なものの総合的統一を介して悟性の表象へと超越論的内容をもたらすが、この働きが純粋悟性概念である。このようにしてカントは、判断と総合における統一を与える機能、判断の論理形式と超越論的内容をもたらす働きを根拠として、各カテゴリーを導出する。

『純粋理性批判』第一版における純粋悟性概念の超越論的演繹は、「三重の総合」に関する導入的議論、「上から」の演繹と「下から(von unten auf)」(A119)の演繹とそれぞれ呼ばれる二つの議論からなる。カントは、概念が基づく意識の統一の超越論的根拠を「超越論的統覚(transzendentale Apperzeption)」として(Vgl. A106f.)、上からの演繹では、自己自身の「汎通的同一性(durchgängige Identität)」である「純粋統覚(reine Apperzeption)」が可能的直観における多様なものの総合的統一の原理を与え(Vgl. A116)、統覚の超越論的統一が構想力の総合と連関することを(Vgl. A118f.)、下からの演繹では、構想力の超越論的機能を介して「根源的統覚(ursprüngliche Apperzeption)」における経験的意識の客観的統一が可能的知覚の必然的制約であることをそれぞれ明らかにする(Vgl. A123ff.)。他方、『純粋理性批判』第二版における純粋悟性概念の超越論的演繹は、二つの議論と間に差し挟まれた注解からなる。カントは、超越論的演繹の前半の議論では、判断の論理的機能を介して統覚の根源的・総合的統一のもとでカテゴリーに直観が従うことを(Vgl. B143)、超越論的演繹の後半の議論では、構想力の超越論的機能を介して統覚の根源的・総合的統一に現象における多様なものが従うことをそれぞれ明らかにする(Vgl. B159f.)。このようにしてカントは、『純粋理性批判』第一版と第二版のいずれにおいても、統覚の総合的統一を根拠として、純粋悟性概念の客観的妥当性を証明する。ただし、カントは、第一版の序文では、認識能力に訴える主観的演繹と客観的演繹という超越論的演繹の二つの側面を区別したうえで、主観的演繹に本質的な目的はないと述べており(Vgl. AXVII)、第一版における三重の総合に関する導入的議論を第二版で削除する。

## 2-2 演繹の分析哲学的解釈と現象学的解釈

ヘンリッヒの考えでは<sup>12</sup>、『純粋理性批判』第二版における超越論的演繹の二つの議論は、二段

12 ヘンリッヒの解釈とそれに対する異論については、次の文献を参照。D. Henrich, Die Beweisstruktur von Kants transzendentaler Deduktion, in: G. Prauss (Hrsg.), *Kant. Zur Deutung seiner Theorie von Erkennen und Handeln*, Köln 1973, S. 90-104. (「カントの超越論的演繹論の証明構造」岡本三夫訳、『カント哲学の体系形式』門脇卓爾監訳、理想社、1979年、151-177頁)；R. Zoicher, Kants transzendente Deduktion der Kategorien, in: *Zeitschrift für philosophische Forschung*, Band VIII, 1954, S. 161-194; H.

階の議論による一つの証明として読む必要がある。第一段階の議論は、直観がすでに直観として統一を含む限りでカテゴリーに従うことを明らかにするが、そのさいに直観の質的な統一に議論を制限している。第二段階の議論は、統一という制限を撤廃し、カテゴリーが感官のあらゆる客観に対して妥当することを明らかにする。さらに第二版の超越論的演繹は、主観的演繹と客観的演繹の二つの側面に対して、主観的演繹を回避しながらも心理学的な説明を残した形になっている。第二版の超越論的演繹における二段階の議論は、カテゴリーが直観に、悟性が感性にどのように関係づけられるかという可能性を重ねて説明する。このようにしてヘンリッヒは、カントが二段階の議論で認識能力の関係に従って知の体系を明らかにするところに、第一版よりも重視すべき第二版の超越論的演繹の本質的な部分があると主張する。さらにヘンリッヒは、一七九七年夏の初めのメモ(Vgl. R6350: XVIII, 675–677)と第一版の超越論的演繹における三重の総合に関する導入的議論の一文(Vgl. A108)の解釈から、超越論的演繹の基礎的な要素として同一性原理と客観性原理を明らかにする<sup>13</sup>。ヘンリッヒによれば、カントの認識論が訴える自己意識の根本機能は、現代の分析哲学が展開する意味の理論に修正を要求することになる<sup>14</sup>。

これに対してガイヤーの考えでは<sup>15</sup>、超越論的演繹の核心部分は判断の論理的機能とカテゴリーとの同一性に関する議論にあり、超越論的演繹は心理学的な議論ではないとされる。超越論的演繹は当初、対象認識がカテゴリーのアプリオリな認識を前提することを経験主義者に対して示そうとする議論であった。その後、カントは自己意識には対象認識が必要であるという議論を展開し、最終的にカテゴリーのアプリオリな認識が自己の時間規定の経験的認識に必要であるところに根拠を求めるようになる<sup>16</sup>。超越論的演繹は、統覚の統一に訴えて「心性(Gemüt)」と規則との関係、「結合(Verbindung, *conjunctio*)」と判断の形式との関係をそれぞれ必然的とするレベルの議論があるが、アプリオリな規則を導入する根拠を統覚の統一とするのでは不十分である。超越論的演繹の核心部分は、対象と自己意識の表象状態を相関させる規則として、判断と概念の原理を導入するレベルの議論にある。このようにしてガイヤーは、超越論的演繹が明らかにするの

---

Wagner, *Der Argumentationsgang in Kants Deduktion der Kategorien*, in: *Kant-Studien* 71, 1980, S. 352–366; H. Robinson, *Anschauung und Mannigfaltiges in der Transzendenten Deduktion*, in: *Kant-Studien* 72, 1981, S. 140–148; V. Nowotny, *Die Struktur der Deduktion bei Kant*, in: *Kant-Studien* 72, 1981, S. 270–279; P. Baumanns, *Kants transzendentale Deduktion der reinen Verstandesbegriffe (B). Ein kritischer Forschungsbericht*, in: *Kant-Studien* 81–4, 1991–2.

- 13 ヘンリッヒが取り上げるのは、次の一文である。「というのも、心性がみずからの表象の多様性の内での自己の同一性をそれもアプリオリに思考することは、把握のすべての総合(それは経験的である)を一つの超越論的統一に従わせて、そうしたアプリオリな規則に従う総合の関係をはじめて可能なものにするようなみずからの働きの同一性を眼前におかなければ、不可能かもしれないからである」(A108)。ハンス・ファイヒンガーは、文献学的考察に従って、この箇所を後にそこからカテゴリーが展開される「萌芽点(Knospenpunkt)」と見る。Vgl. Henrich, *Identität und Objektivität*, S. 101–107; H. Vaihinger, *Die Transzendentale Deduktion der Kategorien*, Halle a. S. 1902, S. 50–51.
- 14 ヘンリッヒの解釈と現代の分析哲学との関係については、次の文献を参照。湯浅正彦『存在と自我——カント超越論的哲学からのメッセージ』、勁草書房、2003年、湯浅正彦『超越論的自我論の系譜——カント・フィヒテから心の哲学・ヘンリッヒへ』、晃洋書房、2009年。
- 15 P. Guyer, *Psychology and the Transcendental Deduction*, in: *Kant's Transcendental Deductions*, pp. 47–68.
- 16 P. Guyer, *Kant and the Claims of Knowledge*, Cambridge University Press, 1987, pp. 91ff., pp. 131ff.

は「コンピュータによるデータの再生産」の条件であり、心理学の事実には関係しないと主張する。

ところが、ストローソンは<sup>17</sup>、超越論的演繹の議論には認識能力に対する反省の過程が含まれると考えるヘンリッヒに対して、「メタ批判的なポイント」としてカントにとっては知りえないはずの感性と悟性の根拠を示す可能性を指摘する。同時にストローソンは、超越論的演繹が心理学的な議論ではないと考えるガイヤーに対して、神経生理学では情報処理と呼ばれる内的操作と超越論的演繹における総合の議論との類似性を指摘する。さらにパトリシア・キッチャーは<sup>18</sup>、超越論的演繹の議論を表象と判断という認知タスクの分析として読み換える。キッチャーによれば、カントは、表象の対象が多様なものの総合的統一であることを明らかにするさい(Vgl. A105, B134)、特に第二版の超越論的演繹では判断を下すことに力点を置いている。対象と対象の表象についての判断という認知タスクの分析としてこれを読み換えるならば、カントが考える総合的統一の概念は、様々な感覚様態に由来する複合的な認知状態のなかで情報を統合する仕方を明らかにすることになる。そのさいに総合という表現が意味するのは、「表象を生産する処理過程」である。このようにしてキッチャーは、「異なる認知状態に含まれる多様な要素を後に続く認知状態のなかで付け加えたり結合したりすること」によって、表象を生産する処理過程という総合の考えにカントの機能主義を見いだす<sup>19</sup>。

他方、ロバート・ハナは<sup>20</sup>、『純粹理性批判』に哲学的心理学と論理的意味論との二面性を指摘し、超越論的論理学を一般的認知意味論として読み換える。ハナは、形而上学的演繹を部分的に再構成し、超越論的演繹で明らかにすべき客観的妥当性に二つのレベルを区別する。形而上学的演繹は思考と判断の深層文法と概念の概念を明らかにする議論として、超越論的演繹は経験的な表象内容、直観、概念、判断の一次的な客観的妥当性とアプリアリな概念と判断の二次的な客観的妥当性を明らかにする議論としてそれぞれ読み換えることができる。とすると、人間の認知における思考は概念が必要であるとして、概念の概念が正当化される。同時に直観は直接性、感性への関係性、思想に対する先行性、個別性、対象依存性という非概念的な性格が認められる。このようにしてハナは、『純粹理性批判』の一般的認知意味論に従って、アプリアリな総合判断として概念がそれを指標化する直観に依存するという条件のもとで真なる命題が整合的に否定可能であると同時に、真理と意味が直観に依存する場合には総合的であると考えている。

近年の『純粹理性批判』解釈では、現代の知覚の哲学における概念主義と非概念主義の論争との関連から、超越論的演繹の議論を引き合いに出す分析哲学的解釈がある。ジョン・マクダウェルは、直観内容を概念的とする概念主義の立場で、形而上学的演繹と第二版の超越論的演繹にお

17 P. F. Strawson, *Sensibility, Understanding, and the Doctrine of Synthesis: Comments on Henrich and Guyer*, in: *Kant's Transcendental Deductions*, pp. 69-77.

18 P. Kitcher, *Kant's Transcendental Psychology*, Oxford University Press, 1990, pp. 70-81.

19 キッチャーは、統一よりも総合を重視する自身の解釈を裏づけるために、マルティン・ハイデガーの解釈で知られる、次の一文を取り上げる。「それゆえ、構想力の純粹(生産的)総合の必然的統一の原理は、統覚に先立ってすべての認識の可能性の根拠であり、特に経験の可能性の根拠である」(A118)。これに対してアリソンは、悟性の自発性を切り捨てているとして、キッチャーを批判する。Cf. Kitcher, *ibid.*, p. 104; H. E. Allison, *On naturalizing Kant's transcendental psychology*, in: Henry E. Allison (ed.), *Idealism and Freedom: Essays on Kant's Theoretical and Practical Philosophy*, Cambridge University Press, 1996, pp. 53-66.

20 R. Hanna, *Kant and the Foundations of Analytic Philosophy*, Oxford University Press, 2001.

る後半の議論を重ね合わせて解釈する<sup>21</sup>。他方、ハナは、非概念的な内容を区別するのがカント本来の立場だとして、第二版の超越論的演繹における後半の議論で非概念主義に抵触するところを修正する<sup>22</sup>。さらに概念主義と非概念主義の論争に対して、カントが超越論的感性論と第二版の超越論的演繹で展開する「自己触発(Selbstaffektion)」の議論によって直観と概念、感性と悟性の二元論の問題が解消されるとする現象学的解釈がある。中野裕考は、ベアトリス・ロングネスの解釈<sup>23</sup>を援用し、主体の「行為(Handlung)」としての運動ないしは自己触発が与える形式的直観と直観の形式、感性の形式としての空間と時間のいずれもが統覚の統一の「圏内」にあると解釈する<sup>24</sup>。

筆者の見るところ、演繹の分析哲学的解釈における概念主義と現象学的解釈は、カントが第二版の超越論的演繹における後半の議論で形式的直観に言及する箇所を手がかりにして<sup>25</sup>、現象と物自体の超越論的区別を現代の哲学思想の観点から解釈する点で共通する。ただし、演繹の現象学的解釈は、ガイヤーやキッチャー、マクダウェルが超越論的演繹の自己意識論を素通りしたり、切り縮めたりするのに対して、自己触発の議論に積極的に意義を見いだす点で異なる。特に自己の自発性と受容性をただ一つの働きの二つの異なる側面とする演繹の現象学的解釈に従って、次のように主張することができる。すなわち、経験的主体の行為としての運動が形式的直観を与え、知覚経験の全体的な「地平」を形成すると同時に、現象としての自己が先行する出来事や行為との因果関係の内に置かれる<sup>26</sup>。もっとも、演繹の現象学的解釈は、規定する自己と規定される自己を同一の自己とする点でカントから離れざるをえない。あるいは行為主体を経験的ではなくて超越論的とするには、ドイツ観念論への回帰が必要かもしれない<sup>27</sup>。例えば超越論的論証をめぐる

21 McDowell, *Having the World in View*, pp.69-89, pp. 147-165, pp. 256-272.

22 Hanna, Kant's Non-Conceptualism, Rogue Objects, and the Gap in the B Deduction.

23 B. Longuenesse, *Kant and the Capacity to Judge: Sensibility and Discursivity in the Transcendental Analytic of the Critique of Pure Reason*, Princeton University Press, 1998, pp. 214-227.

24 中野裕考『カントの自己触発論——行為からはじまる知覚』、東京大学出版会、2021年。

25 ハイデガーは、超越論的演繹における形式的直観への言及から超越論的感性論の配置を矯正するパウル・ナトルプに対して、形式的直観が根源的表象ではなくて派生的表象であり、直観の形式を前提するとして、直観の形式が形式的直観へと解消されたり降格されたりしてはならないと批判する。ハイデガーは、次のように述べる。「純粹直観はそれゆえ、確かに直観されるもの(das Angeschautе)を持ち、しかもこれを直観すること(das Anschauen)の内、直観することを通じてのみ持つ」。アリソンもまた、ストローソンの解釈を退けるさい、ハイデガーと同様に形式的直観と直観の形式、直観するものの形式と直観されるものの形式を区別し、空間と時間を直観されるものの形式とする。Vgl. P. Natorp, *Die logischen Grundlagen der exakten Wissenschaften*, Leipzig/Berlin, 1910, S. 275-276; M. Heidegger, *Phänomenologische Interpretation von Kants Kritik der reinen Vernunft*, in: *Gesamtausgabe*, II. Abteilung, Bd. 25, Frankfurt am Main 1977, S. 132-139; M. Heidegger, *Kant und das Problem der Metaphysik*, in: *Gesamtausgabe*, I. Abteilung, Bd. 3, Frankfurt am Main 1951, S. 47; H. E. Allison, *Kant's Transcendental Idealism. An Interpretation and Defense*, New Haven/London: Yale University Press, 1983, pp. 96f.; C. Onof and D. Schulting, Space as Form of Intuition and as Formal Intuition: On the Note to B160 in Kant's *Critique of Pure Reason*, in: *Philosophical Review*, Vol. 124, No. 1, 2015, pp. 1-58.

26 中野、前掲書、81-91頁、169-174頁を参照。

27 フリードリッヒ・カウルバッハは、何らかの対象について「姿勢をとる(Stellung-nehmen)」という行為に対する反省としてカントの超越論哲学を解釈し、カントとG・W・F・ヘーゲルの思想の内にフリードリッヒ・ニーチェの遠近法主義を見いだす。Vgl. F. Kaulbach, *Philosophie des Perspektivismus. 1. Teil*.

分析哲学との論争では、ブブナーは、超越論的論証が訴える「自己関係性(self-referentiality, Selbstbezüglichkeit)」として、「それが述べるところのものを述べるとともにそれ自体についても何かを述べる」関係性を考える<sup>28</sup>。しかし、ゲアハルト・シェーンリッヒによれば、カントが考えるアприオリな自己関係性は、ブブナーが考える絶対的な自己生成の関係性ではなく、記号的・外的構造を必然的に伴う「破れた自己関係性(gebrochene Selbstbezüglichkeit)」、自己を常にみずからの外に対して自己とする関係性でなければならない<sup>29</sup>。

### 3 純粹悟性概念の超越論的演繹の意義

とすると、純粹悟性概念の超越論的演繹は、現代の哲学思想に対してどのような意義があるか。最後に筆者は、自己を常にみずからの外に対して自己とする統一という意識のあり方を主張する超越論的演繹の自己意識論の独自性を明らかにする。

#### 3-1 第二版の超越論的演繹における二段階の議論

第二版の超越論的演繹は、ヘンリッヒに従って二段階の議論とするならば、以下のようにまとめられる。第二版の超越論的演繹の第一段階での議論は、次の三つの論点からなる。①カテゴリーは判断における論理的機能に根拠があるが、判断では多様なもの一般の結合、与えられた概念の統一が思考されている (§15)。すべての私の表象に伴われえなければならない「私は思考する」という表象は、自発性の「働き(Aktus)」として経験的統覚から区別されるべき純粹統覚であるとともに、他の表象によってそれ以上伴われえない自己意識として根源的統覚であり、自己意識の超越論的統一としてアприオリな認識の可能性を示す。多様なものの総合的統一と意識の同一性は、いずれもが統覚の統一のもとにある (§16)。感性と関連する直観の可能性の最上原則として、直観のすべての多様なものは空間と時間の形式的制約に従う。これに対して悟性と関連する直観の可能性の最上原則として、直観のすべての多様なものは統覚の根源的・総合的統一の制約に従う (§17)。②ところで、統覚の超越論的統一とは客観的統一であり (§18)、与えられた認識を統覚の客観的統一へともたらず様式は判断である (§19)。③したがって、すべての直観は統覚の根源的・総合的統一における判断の論理的機能としてのカテゴリーに従う (§20)。このようにしてカントは、第二版の超越論的演繹の第一段階では、判断の論理的機能を介して、直観がカテゴリーに従わなければならないとする根拠が統覚の総合的統一に求められることを明らかにする。

他方、第二版の超越論的演繹の第二段階での議論は、次の三つの論点からなる。①可能的直観はすべて感性的であり、感性的直観は純粹直観と経験的直観のいずれかである。ただし、対象一般の思考が純粹悟性概念によって認識となるのは、純粹悟性概念が経験的直観へと適用されうる場合に限られる (§22)。②純粹悟性概念は、感性的制約から自由であるが、客観的实在性を欠い

---

*Wahrheit und Perspektive bei Kant, Hegel und Nietzsche*, Tübingen: Mohr (Paul Siebeck), 1990.

28 Bubner, Kant, *Transcendental Arguments and the Problem of Deduction*, p. 460. (「カント・超越論的論証・演繹の問題」、11頁)

29 G. Schönrich, *Kategorien und transzendente Argumentation. Kant und die Idee einer transzendentalen Semiotik*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1981, S. 228ff.



た単なる思考の形式である。非感性的直観の客観を与えられたものとして想定しても、それは認識ではない (§23)。直観一般の多様なものが単なるカテゴリーのもとで思考される悟性の結合は知性的総合であり、感性的直観の多様なもののアプリアリに可能的な総合は形像的综合である。統覚の根源的・総合的統一が関わる形像的综合は構想力の超越論的综合であり、感性に対する悟性の「作用 (Wirkung)」、可能的直観の対象に対する悟性の適用である (§24)。私は表象一般の多様なものの超越論的综合の中で、したがって根源的・総合的統一の中で自己自身の存在を意識する。これに対して私は私自身に現象する通りに私を認識するので、自己自身の意識はまだなお自己自身の認識ではない (§25)。③したがって、空間と時間が感性的直観のアプリアリな形式であるという前提のもと、カテゴリーは、感性的直観の多様なものの総合的統一における経験の可能性の制約として、経験のすべての対象にアプリアリに妥当する (§26)。このようにしてカントは、第二版の超越論的演繹の第二段階では、構想力の超越論的综合を介して、カテゴリーが客観に妥当しうるとする根拠が統覚の総合的統一に求められることを明らかにする。

### 3-2 超越論的演繹の自己意識論

筆者の考えでは、超越論的演繹の自己意識論が主張するのは、以下の二点である。第一に、超越論的演繹の自己意識論は、悟性が判断の能力として自己の外部を求めなければならない必然性を主張する。カントは、第二版の超越論的演繹の第一段階では、次のような議論を展開する。すべての結合は、それを意識するかどうか、直観の多様なものの結合か、様々な概念の結合か、直観が感性的か非感性的かのいずれの場合でも、悟性の総合の働き、主観の自己活動性の働きである。ところで、結合は、多様なものの総合的統一の表象であるゆえ、統一の表象によって可能となる。それゆえ、カテゴリーは判断の論理的機能に根拠があるが、判断では結合として与えられた概念の統一が思考されているので、カテゴリーは結合を前提とする (Vgl. B129ff.)。このようにしてカントは、悟性の自発性による多様なものの総合的統一に従ってカテゴリーが結合として働くと考える。結合そのものは同種的なものの数学的な結合としての「合成 (Zusammensetzung, *compositio*)」と異種的なものの力学的な結合としての「連結 (Verknüpfung, *nexus*)」の二つの種類がある (Vgl. B201Anm.)。異種的なものが対象となりうるためには、統一に従って結合が自己を超えたところに対象を求めなければならない。他方、カントは、第一版の超越論的演繹の導入的議論では、統覚の超越論的統一に基づいて表象の関係が法則に従うようになるとして、次のように述べる。「超越論的对象」= X の純粋概念は「すべてのわれわれの経験的概念一般に対象との連関を、つまり客観的実在性を与える」が、その連関は「意識の必然的統一以外の何ものでもなく、それゆえにまた多様なものを一つの表象の中で結合する心性の共通の機能による (durch gemeinschaftliche Funktion des Gemüts) 多様なものの総合の必然的統一以外の何ものでもない」 (Vgl. A109)。超越論的統覚は超越論的对象 = X を介して現象を対象とするが、現象の対象は常に X に留まって自己の外部に措定されなければならない<sup>30</sup>。

第二に、超越論的演繹の自己意識論は、規定する自己が単なる自己として規定される自己を外対象から区別しなければならない必然性を主張する。カントは、第二版の超越論的演繹の第二

30 この点については、次の文献を参照。牧野英二『カント純粋理性批判の研究』、法政大学出版局、1989年；H. E. Allison, *Kant's Transcendental Deduction. An Analytical-Historical Commentary*, Oxford University Press, 2015, pp. 348-354, pp. 378-388.

段階では、統覚の総合的統一が構想力の超越論的総合に関わり、多様なものの総合的統一の内で私が自己自身を意識するとして、次のように述べる。「これに対して私が表象一般の多様なものの超越論的総合の内で、したがって統覚の総合的な根源的統一の内で私自身を意識するのは、私が私に現象する通りにでもなければ、私が私自体である通りにでもなく、ただ私があると意識するだけである」(B157)。他方、カントは、第一版の超越論的弁証論の「純粹理性の誤謬推理について」では、次のように考える。外的経験と内的経験を内に含む「われわれ」は、「思想の超越論的主観」(A346/B404) =  $x$  としての単なる一人称の主語であり、それを越え出た「内的感官の超越論的対象」(A361)としての魂ではない<sup>31</sup>。

このように超越論的演繹の自己意識論は、悟性が判断の能力として自己の外部を求めなければならない必然性、規定する自己が単なる自己として規定される自己を外的対象から区別しなければならない必然性を主張する。ヘンリッヒによれば、超越論的演繹は、基礎的な主語－述語形式の前提を複合的・個別的客観と単一的・同一的主観との相互に還元されえない連関に見出す議論に本質的な部分がある<sup>32</sup>。超越論的演繹の自己意識論は、悟性が異種なもの力学的な結合の判断を通じて、単一的・同一的主観の外部に複合的・個別的客観を求めなければならない必然性を主張するとも言えよう。したがって、超越論的演繹は、自己を常にみずからの外に対して自己とする統一という意識のあり方を主張する自己意識論として分析哲学における自己知の議論に重ね合わせるならば<sup>33</sup>、ヘンリッヒが示唆するように、現代の心の哲学と意味の理論に現象学とは異なる形で修正を要求する議論として解釈することができる<sup>34</sup>。

## 結論

以上の考察によって筆者は、『純粹理性批判』における純粹悟性概念の超越論的演繹について、次の点を明らかにした。すなわち、超越論的演繹は、アプリアリに可能であるべき「対象一般」についての「認識様式」の超越論的認識(Vgl. B25)の手法手続きにおける本質的な部分が自己意識論にあり、自己を常にみずからの外に対して自己とする統一という意識のあり方を権利として主張する。認識論と存在論との一致を考えるカントの哲学思想は、超越論的演繹を現代の心の哲学と意

31 さらにカントは、「形而上学の進歩に関する懸賞論文」では、統覚の主観としての論理的・知性的な私、経験的意識における知覚の主観ないしは客観としての心理学的・感性的な私、物自体としての私の区別に言及している(Vgl. XX, 269ff.)。カントが展開する自己触発論は、その前提に超越論的演繹の自己意識論があることを踏まえる必要がある。この点については、次の文献を参照。渋谷治美『カントと自己実現——人間讃歌とそのゆくえ』、花伝社、2021年、91-184頁。

32 Henrich, *Identität und Objektivität*, S. 31-43, S. 94-101. Vgl. R. Hiltcher, Kants Begründung der Adäquationstheorie der Wahrheit in der transzendentalen Deduktion der Ausgabe B, in: *Kant-Studien* 84, 1993, S. 426-447.

33 Henrich, *a. a. O.*, S. 110-111. Cf. U. Renz, Selbsterkenntnis: Eine kantische Strategie, in: Motta, Schulting, and Thiel (ed.), *ibid.*, pp. 571-596; M. Soboleva, Knowledge, Self-Knowledge and Self-Identity: Transcendental and Empirical Arguments, in: Motta, Schulting, and Thiel (ed.), *ibid.*, pp. 597-612.

34 Cf. K. R. Westphal, Wie beweist Kant die „Realität“ unseres äußeren Sinnes? in: Motta, Schulting, and Thiel (ed.), *ibid.*, pp. 525-570.

味の理論の文脈では自己知の議論として読み直すべき意義がある<sup>35</sup>。分析哲学や現象学に対する超越論的演繹の自己意識論の独自性を指摘して本稿の結論としたい。

---

35 筆者の考えでは、超越論的演繹の自己意識論は、ドナルド・デイヴィッドソンによる三角測量の議論における自己知のモデルとして解釈することができる。この点については、次の拙著を参照。『『純粹理性批判』の言語分析哲学的解釈——カントにおける知の非還元主義』、晃洋書房、2018年。